

名詞文の時制をめぐって

—メンタルスペース理論の視点から—

川添一郎 (全学教育開発センター)

要旨

本稿は名詞文のテンス(「タ形」)に関して、メンタルスペース理論の視点から考察したものである。これまでの先行研究では名詞文の構造(「指定と措定の区別」)への言及が不十分なためいくつかの問題が未解決のままであると思われる。そこで、本稿では名詞文の構造を改めて整理し、さらにメンタルスペース理論を援用して、名詞文(「タ形」)が持つ複数の意味用法をスペース配列の違いとして統一かつ明示的に記述することを試みる。

キーワード: 名詞文のテンス、指定と措定、メンタルスペース理論、スペース配列

1. はじめに

名詞文(「XはYだ」)の時制は、通常、文末辞の時制によって決まる。

- (1) a. (当時) 太郎は大学生だった。 <過去>
 b. (現在) 太郎は大学生である。 <現在>
 c. (来年の春) 太郎は大学生である。 <未来>

即ち、命題<太郎は大学生>は、過去時制文末辞「-だった」と共起すると過去時制になり、非過去時制文末辞「-だ」と共起すると非過去時制(現在・未来)になる。

しかしながら、この対応が見られないケースがある。

- (2) a. 昨日は月曜日だ/だった。 b. 今日はエイプリルフルでしたね/ですね。

この例では命題(<昨日は月曜日><今日はエイプリルフル>)が内的に持つ時制(a 過去 b 現在)と文末辞の時制が一致することもあるが、下線部のように命題が過去時制なのに非過去の文末辞(「-だ」)と対応させることも、逆に、非過去時制内容を持つ命題を過去時制文末辞(「-だった」)と共起させることも可能である。

田村(2008:181)は(2)に注目した名詞文の時制についての考察であり、多くの示唆を与えるものであるが、そこにはいくつかの問題点があるように思われる。まず、「現代日本語の名詞文の時間表現を体系的に整理すること」を目的とし、名詞文の時間表現の記述的側面を重要視したために、

- (3) 説明装置を含め、個々の概念に対する議論が不十分である

と思われる。まず、考察の中心概念<[XはY]の時間内容>の定義が曖昧である。また、「XはYだ」の構造には<Xは[Yだ]>と<[XはY]だ>の2つが考えられるがそのことの詳

細な議論を経ないで後者を名詞文の本質的構造としている点も問題であろう¹⁾。

同時に、名詞文の時間表現の体系的記述・整理と重要視しつつも、

(4) 分類上の各項目の定義が曖昧であり、各々の区別が分かりにくい

という問題もある。例えば、田村は<特定の時間位置に位置付けのない名詞文>の下位類として<超時>と<時間性不問>を立てている。両者の違いは<「一だった」と共起すると時間性不問は「想起」になる>点だけである。下位類の各項目が連続しているということは理解できるが、項目間の明確な相違点(項目ごとの特徴付け)が必要であると思われる。また、名詞文の根幹にあると考えられる「指定」と「措定」の区別を無視して両者を混在して整理している点にも疑問が残る²⁾。

以上の背景の下、本稿の構成は以下の通りである。まず、田村(2008)を取り上げ、そこで展開されている要点を整理する。次にそれを批判的に検討し問題点を抽出する。最後にその問題点に言及しつつメンタルスペース理論の観点から本稿の見解をまとめる。

2. 田村(2008)の名詞文の時間表現の全体像

まず、田村が名詞文の時間表現をどのように整理したのか、その全体像を示す³⁾。

田村は名詞文の時間表現を大きく

(5) a. 特定の時間位置に位置付けのない名詞文

b. 特定の時間位置に位置付けのある名詞文

に分類する。前者は[XがY]が文末の時制辞と無関係に成立するものである。例えば「昨日は月曜日だ」「日本一高い山は富士山だ」がそれである。後者は[XがY]が文末の時制辞に影響を受けてその範囲(時制)内においてのみ成立するというものである。例えば「今日は火曜日だ」「おれのおじいちゃんは理科の先生だったのよ」というタイプである。この例では<火曜日であるのは今日(昨日も明日も火曜日ではない)>、<理科の先生だったのは過去の話であり、現在は理科の先生ではない>の意味となる。

次に、田村は(5)をさらに(6)(7)に下位分類する。

¹⁾ 名詞文の構造の本質について田村(2008:21)は「名詞文の構造をどう捉えるかに関する2つの立場は、どちらが正しいというものない」と述べ、<Xは[Yだ]>と<[XはY]だ>そのものの議論を行っていない。即ち、田村の名詞文構造に関する仮定には何らかの論理的根拠があるわけではない。「だ」はコピュラ(繫辞)のための品詞であるが、その結合の捉え方によって名詞文の構造理解が異なってくる

²⁾ 名詞文の時間表現の根底には「措定」「指定」概念が大きく関わっており、それぞれの特徴を押さえた上で初めて名詞文の時間表現に対する説明が可能になるというのが本稿の見解である。この点については4節で改めて取り上げる。

³⁾ 本節で示されている例文はすべて田村(前掲)の中からの引用である。

- (6) a. <超越時>を表す名詞文 :【同値】【包含関係】【X項の特性を表す】
 b. <時間性不問>を表す名詞文:【時制形式の交換現象】【過去の仮定】
 【歴史的現在】
- (7) a. <現在>を表す名詞文 :【現在の状態と動きを表す】
 【トキ副詞(「今」など)やトキ名詞(「今日」など)によって現在を表す】
 【発話場面に縛られたもの】 【現在の存在や所在を表す】
 b. <未来>を表す名詞文:【トキ副詞(「今」など)やトキ名詞(「今日」など)に
 よって未来を表す】
 c. <過去>を表す名詞文:【基本的な過去】【現在を含んだ過去】
 【体験に取り込まれた過去】【不確かな認識の判明】【想起】

(6)(7)の中で、(7ab)は時制に関して特に問題はない。[XがY]の内容と文末辞の時制の関係で興味深いのは両者が対立しているタイプである。即ち、(6a)特定の時間位置に位置付けのない名詞文と(6b)特定の時間位置に位置付けのある名詞文の<過去>を表す文、及び(7c)である。それを整理したのが(8)であり、本稿の考察対象となる。

(8) 特定の時間位置に位置付けのない名詞文

名詞文が持つ時間的意味

- (a) <超越時> : クジラは哺乳動物だ。 日本一高い山は富士山だ。
 (b) <時間性不問> : 昨日は月曜日だ。 明日は休みだった。

特定の時間位置に位置付けのある名詞文

名詞文が持つ時間的意味

- (a) <過去> : (おみくじをひいて) やっぱり吉だった。
 (不確かな認識の判明)
 : 今日はエイプリルフールでしたね。(想起)

3. 田村(2008)の問題点

井上(2009)は田村(2008)の書評であり、そこで2つの問題点を指摘している。また、それ以外で本稿が重要だと考える問題点が1つある。以下、それらについて述べる。

3. 1. 名詞句の構造

井上が指摘する問題点の1つは<名詞句の構造>である。「明日は休みだった」に対して、田村は(9)の説明を行うが、井上は(10)のようにも説明できることを示す。

- (9)「明日は休みだった」は<[明日は休み]だった>と解釈できる。これは<明日は休み>という情報の入手時が過去であったこと(想起)を示す。なぜなら「明日は休みだった」という文は<[明日は休み(未来)]ダッタ>という構造を持つからである。
- (10)「XはY」という単位での時間的内容を考える必要はない。たとえば「明日は休みだった」が<想起>の解釈以外で非文になるのは「明日」と「ダッタ」が矛盾するからである。また、<想起>の意味を表す場合は「明日ハ休ミ」の部分に時制がない

(XとYの論理関係のみを表す) と考えるので「XはY」の時間的内容ということにはならない。

田村の見解(「XはY」という単位での時間的内容)は、それを想定しない立場でも現象の説明ができる。一方、井上の見解は、<XとYの論理関係のみを表す>ことと<想起>の意味になることとの関連性の説明が弱いように思われる。<想起>の場合、<命題成立時は過去>で、<それを現在時から見ている>という論理が必要であるが、それが(10)の内容に含まれているのか疑問が残る。また、両者共に名詞文の構造を<[XはY]だ>と考えているが<Xは[Yだ]>を排除する理由が示されていない。(9)(10)は名詞文の構造を<[XはY]だ>に限定した考察である点にも問題があることを本稿で示したい。

3. 2. 名詞文の意味解釈のメカニズム

井上が示す2つめの疑問点は、<「XはY」の時間的内容と時制形式が一致しない場合>の田村の説明に対するものである。田村は(11)の事実を(12)のように説明する。

(11) 「XはY」の時間的内容と時制形式が一致しない場合、

「10ハYダ」ハ<ジカンセイフモン>(レイ:キノウハヤスマダ)

「XはYだった」ハ<想起>(例:今日はエイプリルフールでしたね)

<不確かな認識の判明>(例:(おみくじをひいて)やっぱり吉だった)

(12) a. <時間性不問>の名詞文は、「XはY」の時間的内容は過去に属するものの、「XはY」の時間性が不問にされ、「XはY」という関係が時間の中で変化することなく成立することが表わされる。

b. <想起>の場合、「だった」は既得知識の入手時を指す。

c. <不確かな認識の判明>の場合、「だった」が指し示すのは、発話時以前の断定に至らない認識時である。「だった」を用いて、客観的事実として成立していた「XはY」の成立時を述べたものである。

それに対して、井上は(13)を示し、(14)と考える。

(13) このうち、<不確かな認識の説明><想起>の説明は「情報的テンス」(金水2001)「情報のアクセスポイント」(定延2004)という観点からの説明とほぼ同じである。これらの研究は主に述語の「状態性」に着目したものであり、名詞文の特性は必ずしも十分には考慮されていない。

(14) 名詞文独自の性質をより重視した分析を行ってれば、オリジナリティが増した。ここから導かれるのは、

(15) 仮に、名詞文の<不確かな認識の説明><想起>が動詞文(状態性)と同じ説明が可能であっても、それが名詞文のどの特性から導かれるのか。

(16) 名詞文の時間表現は動詞文の分析結果で全て説明できるのかについての分析である。(15)(16)について次節で考察する。

3. 3. 措定と指定

ここまでが田村に対する井上の見解である。ただ、さらに田村への疑問点として<措定

と指定の区別の不十分さ>があると思われる。措定と指定に関して田村は、

- (17) ところが興味深いことに、時間表現に関しては措定文と指定文、及びウナギ文（例、（料理の注文場面にて）「私はお寿司にする」「僕はウナギだ」「俺は天ぷらだ」）は区別する必要がない。つまり「～は」の文と「～が」の文に違いがなく、XとYの名詞を入れ替えても同じ現象が起きる。例えば、「これはライラックだったね」（措定文）という名詞文は、「想起」になり、「これがライラックだったね」（指定文）といっても「想起」になる。つまり「～は」と「～が」の文に、時間表現では違いがなく、またX項とY項を入れ替えても同じ現象が起きる。以上の指摘を確かめるためにも、本研究では措定文と指定文、ウナギ文を混ぜて示す（p 4）。

と主張するが、そもそも措定と指定の違いは「～は」「～が」の違いに解消できるものなのだろうか。少なくとも本稿ではそのようには考えない⁴⁾。即ち、指定と措定の違いは2つの名詞句間の関係で決まると考えている。故に本稿では(17)に異を唱え、指定と措定の違いが名詞文の時間表現に関わっていることを主張する。この点も次節で取り上げる。

3. 4. 問題点の整理

以上が本稿の考える田村（2008）の問題点であるが、それらを整理すると(18)となる。

- (18) a. 名詞文の2つの構造の吟味が不十分である。
 b. 動詞文での分析と名詞文での分析の相違点が明確でない。
 c. 名詞文そのものの特質を押さえた上での分析がなされていない。

この3点は連動すると思われる。田村は「XはYだ」の構造の2つの構造のうち<Xは[Yだ]>を切り捨てて、<[XはY]だ>のみを取り上げた。この点が、名詞文と動詞文の相違点の分析を妨げたと思われるからである⁵⁾。そしてその元々の要因として措定文と指定文の同一視があると考えられる。それが名詞の2つの構造の内の片方の無視へと繋がり、結果、名詞文と動詞文の相違点を観察できないものになったと本稿は考える。

⁴⁾ 本稿が考える措定文・指定文は概ね西山（2003）に準ずる。但し、「変項名詞句」は認めず、それは「役割」の中に解消できると考える。その点で井元（2004）と同じとなる。

⁵⁾ 名詞文が2つの構造を持つと考えられるのに対し、動詞文（動作性動詞）は<[XはY]だ>の構造を持たない。名詞文が「[私は学生]だった」、「私は[学生だった]」と言えるのに対して、動詞文は「私は[京都へ行った]」は言えるのが「[*私は京都行く]た」は言えない。これは動作性動詞が動作概念の中にテンス（時制）を含んでいるからである。尾上（2001：366）は「動作性動詞の場合、「-スル」の形は動作概念を直接的な言語化の形として、一面では動作・作用の類別的な語彙名称として働く（この故に、辞書の項目は古来終止形で立てられている）。…語の意味の姿として時間的変化であるものを変化そのものとして言語化する形…」と説明している。状態性動詞の場合はそうではない。確かに、状態性動詞も辞書の項目は終止形で立てられているが、それは（「ある」「いる」がそうであるように）ラ行変格活用として別の種類として分類されている。

4. 名詞句と指定文・措定文

前節では先行研究を批判的に検討し問題点を整理した。本節以降はそれについての考察となる。まず、名詞文の構造、指定と措定を押さえ、その後その時間表現の分析へと進む。

4. 1. 名詞句の構造と名詞文

名詞句の構造を、指示性の面から見た場合、そこに「関数」としての特徴があることは周知の通りである。以下、井元（1995）を参照しつつこの点を整理する。

名詞句は「関数」としての構造を持つ。即ち、一般的関数表示（ $F(x) = y$ ）を用いて説明すると、

$$(19) F(x) = y : F \text{ 役割} \quad (x) \text{ スペース} \quad y \text{ 値}$$

という関係になる。例えば、〈大統領〉という名詞は、

$$(20) \text{大統領 (2018 米国) = トランプ} \quad \text{大統領 (2011 米国) = オバマ} \\ \text{大統領 (2009 仏国) = シラク}$$

となる。即ち、「全ての名詞句は役割と値双方を持つ可能性を有する⁶⁾」となる。結果、ある名詞句（X）の役割をA、値をaとすると名詞句（X）は、

$$(21) X : A = a$$

と表すことができる。これはあるスペース内では名詞句Xは役割（A）として表示されても値（a）として表示されても等価であることを示す。同様に名詞句（Y）の役割をB、値をbとすると、

$$(22) Y : B = b$$

となる。これを名詞文（「XはYだ」）に代入すると、

$$(23) X (A = a) \text{ は } Y (B = b) \text{ だ。} \quad \text{即ち、} [A = a] \text{ は } [B = b] \text{ だ。}$$

となる。従って、名詞文（「XはYだ」）は（24）の構造を持つことになる。

$$(24) [A (= a)] \text{ は } [B (= b)] \text{ だ}^7$$

4. 2. 措定文と指定文

(17)に示したように、田村は措定文と指定文の違いを「～は」と「～が」の違いに求める。これは本稿の措定文と指定文の考え方と異なる。本稿では、措定文・指定文の意味を（25）、両者の構造的相違点を（26）とする。

⁶⁾ これは措定文「太郎は学生だ」の「学生（だ）」についても当てはまると本稿は考える。即ち、指定文が〈世界の中の個体〉を指すのに対して、措定文は〈対象個体を持つ属性集合の中の1つの属性を指す〉と考える。即ち、指定文では、あるスペース内で役割（R）として取り上げた時の値（V）を、別のスペースで同定する（間スペース関係）である。一方、措定文では、あるスペースから見たときその値がどの属性（A）と結びついているかを同定する（単一スペース内関係）。前者は他のスペースとの関係で値を変え、後者は一つのスペース内で結びつく属性を変えるのである。

⁷⁾ この場合、スペースはデフォルトとして固定されているため特に表記する必要はない。

(25) 措定文：前項名詞句の属性を後項名詞句で表わすもの

指定文：前項名詞句の役割に後項名詞句の値を帰するもの

(26) 措定文：倒置形が成立しない／指定文：倒置形が成立する

まず措定文だが、措定文で〈倒置形が成立しない〉ことは、「昨日は月曜日だ」に対して「*月曜日が昨日だ」が成立しないことから理解できるが、(24) を用いて表示すると、

(27) < [A (= a)] は[B (= b)] だ > に対して、

< [B (= b)] が[A (= a)] だ > が成立しない

となり、それは < A ≠ B, A ≠ b, B ≠ a, a ≠ b > であることを意味することになる。このことは [A (= a)] と [B (= b)] の双方が各々の位置に存在することで、1つの論理関係を結んでいることを示す。即ち、措定文（「XはYだ」）は、

(28) Xを満たすのはA又はaであり、且つ、Yを満たすのはB又はbである

という構造を持つ。結果、

(29) [A (= a)] がXの位置にあり、そして、[B (= b)] がYの位置にあることで

表される論理関係

を措定文は表していることになる⁸⁾。

一方、指定文で〈倒置形が成立する〉ことは、「源氏物語の作者は紫式部である」に対する「紫式部が源氏物語の作者である」が成立することから分かる。同様に考えると、

(30) < [A (= a)] は[B (= b)] だ > に対して、< [B (= b)] が[A (= a)] だ >

が成立する。即ち、< A = B = a = b > となる。それはXを満たすのはA又はa

であり、且つ、Yを満たすのはB又はbである

ことを解釈レベルで可能としつつも、本質的には「Xを満たすのはB又はbであり、且つ、Yを満たすのはA又はaである」を意味する。

4. 3. 措定文・指定文と名詞句の構造

3節(3.1~3.4)で問題になったことの1つに、名詞文の構造をどのように考えるべきなのかというものがあつた。即ち、名詞文の構造を、

(31) a. < [XはY]だ > と考えるのか

b. < Xは[Yだ] > と考えるのか

c. < [XはY]だ > と < Xは[Yだ] > の双方を考えるのか

という問題である。結論を先に示すと本稿は(31c)が正しいとする。但し、全ての名詞文に2つの構造を認めるのではない。以下、その点について述べる。

措定文は(28)の内容を持つが、それが示しているのは[XはY]という1つの命題であると思われる。即ち、XとYを切り離すことはできず、あくまで[XはY]をセットとしてのみ解釈できるのである。従って、その構造は < [XはY]だ > となる。

一方、指定文の内容は(30)である。(30)は(28)と同じだが、それ以外に、XとYを切り離して解釈することが可能である。即ち、< Xは[Yだ] > の構造の場合である。

⁸⁾ これは措定文が倒置形を持たないことから理解できる。

このことは「スペース設定」を考えるとわかりやすいだろう。「XはYだ」に関して、そのスペース設定は、

- (32) a. Xは【あるスペースにおいて】Yだ
 b. 【あるスペースにおいて】XはYだ

の2種類が考えられる。(32a)が所謂<値変化の役割解釈>を表すものであることは言うまでもないが、それ以外の解釈も可能である。例えば、

(33) それでは次の質問です。「源氏物語の作者は紫式部です。」これは正しいですか、正しくないですか、YES 又は NO で答えて下さい。

という場合、<源氏物語の作者は紫式部> (即ち、XはY) 全体を取り上げていることになる。つまり、<[XはY]だ>の構造で解釈しているのである。

一方、措定文の場合、<値変化の役割解釈>はあり得ない。なぜならそれは[XはY]全体を取り上げた文型であり、それ故、措定文の構造は<[XはY]だ>のみとなる。

以上のことから、本稿では名詞文の構造を措定・指定の観点から以下のように整理する (<[XはY]だ>を「命題構造」、<Xは[Yだ]>を「値変化役割構造」と呼ぶことにする)。

(34) 名詞文の構造

措定文： [XはY]だ (命題構造)

指定文： [XはY]だ (命題構造) 及び Xは[Yだ] (値変化役割構造)

5. 名詞句の時間表現

これまでの議論を踏まえて、以下、3節(3.1~3.4)で取り上げた問題点に言及しつつ、名詞句の時間表現に関する本稿の見解を纏める。

5. 1. 特定の時間位置に位置付けのない名詞文と名詞句の構造

<特定の時間位置に位置付けのない名詞文>に関する田村と井上の対立点は、[XはY]に「時間的内容を考える必要があるかないか」であった。<特定の時間位置に位置付けのない名詞文>を田村は(35)のように整理する。

(35) 特定の時間位置に位置付けのない名詞文

・名詞文が持つ時間的意味

(a) <超越時> : クジラは哺乳動物だ 日本一高い山は富士山だ

(b) <時間性不問> : 昨日は月曜日だ 明日は休みだった

この場合、<超越時>に関しては、元々、[XはY]の中に時間要素がない。問題は<時間性不問>である。「昨日は月曜日だ」と「明日は休みだった」の「昨日」と「明日」をどのように理解すべきかである。この問題を本稿は次のように考える。まず、

- (36) そもそも、「クジラは哺乳動物だ」の「クジラは」と「昨日は月曜日だ」の「昨日は」を同じレベルで扱うことに問題がある。前者は「哺乳動物だ」という属性の対象である。同様に考えると後者は「月曜日だ」という属性の対象は「曜日」であり、それ故、「昨日は曜日は月曜日だ」が基底形であり、「曜日は月曜日だ」という冗長性が除かれた結果「昨日は月曜日だ」となった

と理解すべきだと思われる。即ち、＜時間性不問＞の文は、

(37) Xは[WはY]だ

([昨日は[曜日は月曜日]だ] [明日は[学校は休み]だった])

という構造を持つ。(37)に従うと、[XはY]に時間性があるとする田村ではなく、時間性を考えない井上の立場に近いが相違点もある。今一度、井上の主張(10)を再引用する。

(38) (=10)「XはY」という単位での時間的内容を考える必要はない。たとえば「明日は休みだった」が＜想起＞の解釈以外で非文になるのは「明日」と「ダッタ」が矛盾するからである。また、＜想起＞の意味を表す場合は「明日ハ休み」の部分に時制がない(XとYの論理関係のみを表す)と考えるので「XはY」の時間的内容ということにはならない。

ここで井上は、＜「明日」と「ダッタ」が矛盾する＞ということの理由を述べず、その指摘のみで終わっている。本稿の立場((37))に従えばその理由は明確である。「明日は休みだった」は＜[明日は[学校は休み]だった]＞という構造を持つが故に、「明日」と「ダッタ」が矛盾するのである。この問題の発端となった、田村の＜時間性不問＞の見解は、名詞文の構造の見落とし(即ち、(37)の構造の無視)があったためではないかと思われる。

さて、(37)の構造(Xは[WはY]だ)では、実際には「W」は発話されない。ということは(37)は、結局、＜Xは[Yだ]＞となる。そうすると(34)を修正しなければならなくなる。もちろんここでの＜Xは[Yだ]＞はあくまで措定文での話であり、指定文における＜Xは[Yだ]＞(値変化役割構造)とは異なる。そこで措定文における＜Xは[Yだ]＞を「属性対象省略構造」と呼ぶことにし、(34)を(39)のように修正する。

(39) 名詞文の構造(修正版)⁹⁾

⁹⁾ ＜[Xは[WはY]]だ＞から派生される＜Xは[Yだ]＞構造を、本稿では措定文の中に入れていますが、これには少し議論の余地があると思われる。即ち、この構造は措定文ではなく、「ウナギ文」の構造ではないかという問題である。WがXとYを結びつける「同定コネクター」と考えることもできるからである(それ故表示されない)。西山(2003: 321-341)でも「ウナギ文は全体としてやはり措定文であり」と指摘し、「語用論的な補完操作によって意味が補完される」とある。西山の補完操作過程と本稿の補完操作過程は異なるが、仮に、＜[Xは[WはY]]だ＞から派生される＜Xは[Yだ]＞構造がウナギ文であるとする、指定文の本質構造は＜Xは[Yだ] (値変化役割構造)＞であるので、名詞文の構造は、

措定文 : [XはY]だ (命題構造)

指定文 : Xは[Yだ] (値変化役割構造)

ウナギ文 : Xは[(Wは) Y]だ (意味補完構造) Wは意味補完要素

と整理することができる。この問題については、今後の課題とし別稿を用意する。今回は指摘のみに留め、名詞句の構造はひとまず(39)とし、以下、議論を進める。

措定文：[XはY]だ（命題構造） 及び Xは[Yだ]（属性対象省略構造）

指定文：[XはY]だ（命題構造） 及び Xは[Yだ]（値変化役割構造）

5. 2. 名詞文の意味解釈のメカニズム再考

井上が示す2つめの疑問点は、<「XはY」の時間的内容と時制形式が一致しない場合>の田村の説明が<金水（2001）や定延（2004）の説明とほぼ同じであり、名詞文の特性が必ずしも十分には考慮されていない（井上（前掲：27）>ということである。そこでまず、田村と金水・定延の見解を比べてみよう（(40)(41)共に下線は筆者（川添））。

(40) 田村の見解

「XはY」の時間的内容と時制形式が一致しないものには、「XはYだ」（<時間制不問>：明日は休みだ）、「XはYだった」は（<時間制不問>：今日はエイプリルフールでしたね）と（<不確かな認識の判明>：（おみくじをひいて）やっぱり吉だった）があり、これは、<時間性不問>の名詞文は、「XはY」の時間的内容は過去に属するものの、「XはY」の時間性が不問にされ、「XはY」という関係が時間の中で変化することなく成立することが表わされる。<想起>の場合、「だった」は既得知識の入手時を指す。<不確かな認識の判明>の場合、「だった」が指し示すのは、発話時以前の断定に至らない認識時である。「だった」を用いて、客観的事実として成立していた「XはY」の成立時を述べたものである。

(41) 金水の「情報のテンス」と定延の「情報のアクセスポイント」

「情報のテンス」：静的述語文が表す状態の情報の性質に基づいて決定されるテンス

「情報」：“もの”は出来事と違って、時間を超越しているので、本来時間性を持たない。この、《特性》が示す“もの”としての側面（金水（2001：68））

「情報のアクセスポイント」（定延（2008：93））：

話し手が、情報にアクセスするための、時間軸上のよりどころ

(40)(41)が同内容の説明であることは明白である。<時間性不問>の名詞文が、<時間性が不問にされ時間の中で変化することなく成立する>ことは、まさにそれが「情報のテンス」だからである。<不確かな認識の判明>が、<発話時以前の断定に至らない認識時、客観的事実として成立していた「XはY」の成立時を述べたもの>はまさに「情報のアクセスポイント（が、過去であること）」を示しているのである。即ち、田村に対する井上の見解（(13)）は正しく、それ故、(40)(41)に関する限り、名詞文と動詞文（状態性動詞文）にテンス上の差はないことになる。それでは、名詞文と動詞文（状態性動詞文）にはテンス上の違いはないだろうか。この問題について次節で考察する。

5. 3. 名詞文の特性に起因する名詞文のテンスの特徴

金水（2001：59-62）は「特殊と言われるタの用法のうち代表的なもの」を、<回想><関連付け><発見>に整理・分類した。このうち<回想>と<関連付け>は、田村の<想起>と<不確かな認識の判明>に相当する。両者の例文を比較するとそれが分かる。

(42) 金水	田村
<回想>	<想起>
そうそう、きょうはぼくの誕生日だった。	今日はエイプリルフールでしたね。
<関連付け>	<不確かな認識の判明>
(店が休みかなと思いながらやってきて)	(おみくじをひいて)
やっぱり今日は休みだった。	やっぱり吉だった。

尚、<発見>については、金水ではその例文の中に名詞文はなく、田村は<発見>という分類枠は設定していない。従って、<回想(想起)><関連付け(不確かな認識の判明)>に関しては名詞文での現象と動詞文(状態性)の現象とでは相違点はなく、名詞文の現象は動詞文(状態性)の場合の説明で可となるが、本稿は、

(43) 名詞文にも<発見>の用法があり、この点が、名詞文の特性を反映した名詞文独特のテンスの特徴(即ち、名詞文と動詞文のテンスの相違点)である

ことを主張する。以下、この点について述べる。

まず、金水が提示している例文の中の名詞文を細かく見ていくと一つの特徴がある。

(44) 金水(2001:59-62)の例文中の名詞文

<回想>	確か、あなたは関西の出身でしたね。 そうそう、今日は僕の誕生日だった。 「良ちゃんは今年いくつだったけ？」 「私、知らないのよ、あなた、どこだったかしら」 今度の上り列車は何時でした。
<関連付け>	(店が休みかなと思いながらやってきて) やっぱり今日は休みだった。

これらの名詞文は倒置形が成立しない。つまり、全て措定文であることになる。措定文の特徴は<[XはY]だ(命題構造)>であった¹⁰⁾。田村も名詞文の構造を<[XはY]の時間内容>を中心に論じている。両者は共に名詞文を<[XはY]だ>と考えているわけであるから、結論が同内容になるのは当然である。

しかしながら、(39)で述べたように、名詞文にはもう一つ指定文としての構造、即ち、<Xは[Yだ](値変化役割構造)>がある。金水(2001)は<発見>用法に名詞文の例を取り上げていないが¹¹⁾。以下の例を見てみよう。

¹⁰⁾ (44)の例文のうち、「良ちゃんは今年いくつだったけ?」「私、知らないのよ、あなた、どこだったかしら」「今度の上り列車は何時でした」は、<Xは[Yだ](属性対象省略構造)>であり、(上述のように)その意味でウナギ文である可能性を考えるべきかもしれないが、ここでは「値変化の役割解釈」を持たない点で、措定文として扱う。

¹¹⁾ 金水(2001)は動詞の「状態性」に着目した考察であるため、ここでの理由でその見解が不十分であるということにはならない。むしろ、名詞文(即ち、本来的に「状態性」を持つ文

(45) おいおい、君、大変なことがわかったよ。エリザベステレーラーの6番目の夫が変わったよ。リチャード・バートンではなくて、クラーク・ゲブルだったよ¹²⁾。

この例文（以下、議論を分かりやすくするために「エリザベステレーラーの6番目の夫は、リチャード・バートンではなくて、クラーク・ゲブルだった」とする）での「タ」は明らかに<発見>の用法である。つまり、名詞文においても、<回想（想起）><関連付け（不確かな認識の判明）><発見>の3つ用法が確認できるのである。

この、<発見>の用法に関して定延（2004：14-15）は「探索意識」「探索課題」という概念を設定する。探索意識とは（46）であり、探索課題は（47）である。

(46) 未知の領域（たとえば見知らぬ街）がどんな様子なのか調べる、一種の体験

(47) 探索によって解決しようとする課題

例えば「あ、庭に猿がいた」と発話する場合、その理解は（48）となる。

(48) 「庭にサルはいまいか？」という探索課題が設定されているので、それだけ探索意識が活性化されやすく、サルの存在が探索という体験として表現されやすい。末尾の「た」が自然なのはそのためである（定延（2004：21））

この（46）（47）に関して、本稿は「探索課題」を「既定知識」に代えることを提案する。既定知識とは、

(49) 探索意識に関連して、話者が探索時に持っている前提となる知識

を指す。例えば、（48）において、探索課題は「庭にサルはいまいか？」であるが、「既定知識」は「庭にサルがいる」というもので、命題形式（即ち、YES/NO で答えられるもの）をとるものである。

既定知識は「一致（実現）」と「不一致（書き換え）」の2つに分かれる。動詞文（状態述語）<発見>用法の場合、既定知識が一致（実現）したが故に「-た」形が使用できるのである¹³⁾。

一方、名詞文の<発見>のときは異なる。即ち、「エリザベステレーラーの6番目の夫はリチャード・バートンであるはずだ」という既定知識が働いており、それが正しくなく（不一致）、「クラーク・ゲブルだ」という新しい事実の理解（書き換え）という意味での<発見>があったときに、「エリザベステレーラーの6番目の夫は、リチャード・バートンではなくて、クラーク・ゲブルだった」と発話するのである¹⁴⁾。動詞文が既定知識との一致（実現）という意味での<発見>であるのに対して、名詞文は既定知識の不一致（否定と書き換え）という意味での<発見>であるところに両者の相違点がある。

(45) が指定文であることに注意されたい。指定文は<Xは[Yだ]>（値変化役割構造）

型) にも<発見>の用法があることを示すことで、金水の見解の妥当性を裏付けることになると言えよう。

¹²⁾ この例文は井元（2004：6-7）の例文をもとに作成した。

¹³⁾ これは定延の見解と同じであり、本稿もそれに同意する。

¹⁴⁾ これが「値変化の役割解釈」の論理である。

を持つ。値が変化するという事は既定知識での値が新規知識での値に変わることである。そこで「既定知識の書き換え」が生まれる。一方、動詞文（状態動詞）の場合、指定文でも同じであるが、[XはY]という「情報」を持つ。この情報は本稿では「既定知識」となる。金水（2001）の「情報」と定延（2004）の「探索課題」を結びつけたものが「既定知識」である。「既定知識」という基準軸を取り入れることで先の＜回想（想起）＞＜関連付け（不確かな認識の判明）＞＜発見＞の範疇間の共通点と相違点が見えてくる。

(50) ＜回想（想起）＞：既定知識の忘却（呼び起こし）

＜関連付け（不確かな認識の判明）＞：既定知識の一致（実現）

＜発見＞（動詞文（状態性））：既定知識の一致（実現）

＜発見＞（名詞文（指定文））：既定知識の不一致（否定と書き換え）

次に、＜関連付け（不確かな認識の判明）＞と＜発見＞（動詞文（状態性））であるが、本稿ではそれを「発話場」の違い（スペース配列の違い）に因るものとする。

6. メンタルスペース理論による分析

メンタルスペース理論では、EVENT・BASE・V-POINT・FOCUSの4つのスペースを設定し時制に関する分析を行う¹⁵⁾。本稿でのスペースの定義は(51)である。

(51) **EVENT**：叙述内容。発話者により捉えられ述定により描かれた事態全体。

BASE：発話場としての現実スペースである「イマ・ココ・ワタシ」

V-POINT：発話場としての信念スペース内での観測点（及び観測基準）

FOCUS：文命題が描く内容の中で発話者が最も中心にそれを描いている部分

¹⁵⁾ Cutrer (1994:75)は4つのスペース設定の動機付けに関して次のように述べる（拙訳）。

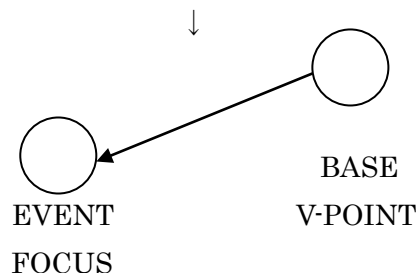
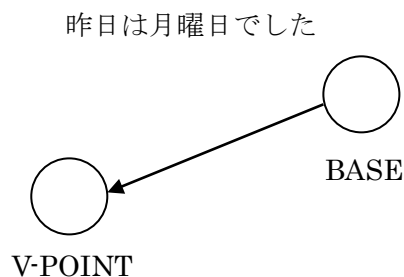
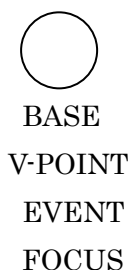
これらの4つの理論的な基本要素[BASE, FOCUS, EVENT, V-POINT]は認知的な構成概念である。これらは言語と現実世界双方から独立した認知構造レベルで稼働する。これらの理論的基本要素は、談話に関して我々が持つ概念や非定式(informal)な直観とも一致する。例えば、談話構築やその解釈において、ある領域内に起こりうる状況や行為を表示する必要があることを我々は知っているが、その結果、EVENTのような概念が必要となる。また我々は注意と記憶システムに起因する構造のために、即、全てのものを知覚したり描写したり又は再生したりすることができず、場面の中のある特定の部分に注意を集中させなければならないことも我々は理解している。故に、FOCUS（が必要となる）。我々が、心的に異なる角度から事物を見ることができるとは認知的基本能力の一部である。それ故V-POINT（が必要となる）。我々が異なる位置から事物を見ることができるとは事実であるが、我々はそれ以上に常に一定の拠り所（立ち位置）を必要とする。従って、BASE概念（が必要となる）。しかし、これらの基本要素は、我々が談話に関して持つ非定式(informal)な見解と一致しているが、その動機付けは、それとの関係においてではなく、むしろ、本稿で提示されている、テンス・アスペクト記述において発揮される説明力の高さに結びついているのである。

(51) に従い、以下、(50) と＜時間制不問＞とについて論じる。

6. 1. ＜時間制不問＞：「昨日は月曜日です」

＜時間制不問＞は命題が時間に関係なく成立している。即ち、現実スペース (BASE) でもそれ以外の観念スペース (V-POINT) においても命題が成立していることになる。従って、BASE と V-POINT を区別する必要はなく、そこから EVENT を参照していることになる。EVENT は常に成立しているので発話場とのズレはない。また「時間に関係なく成立」ということを描いているので、FOCUS は BASE (V-POINT) にある。結果、4つのスペースが同じ位置にあることになる。「昨日は月曜日でした」では、まず BASE の位置から V-POINT が過去に移動する。そしてそこに EVENT が位置する。その後、V-POINT は現在の位置に復帰する (ここで過去形が成立する)。ここでは EVENT が過去であることを描こうとしているので FOCUS は EVENT の位置にある。

(52) 昨日は月曜日です

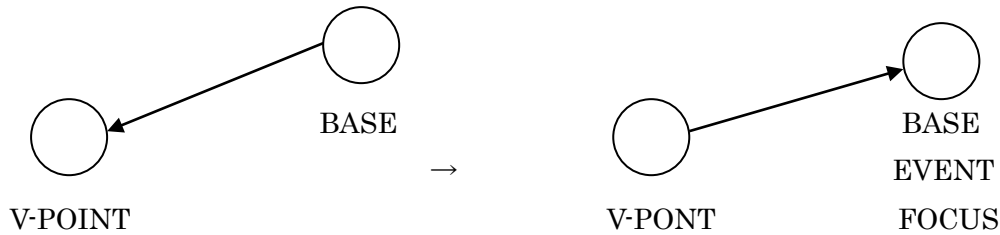


6. 2. ＜回想 (想起)＞：「今日はエイプリルフールでしたね」

＜回想 (想起)＞は観念スペース内で、＜かつて得て、その後忘れていた規定知識 (ここでは「今日はエイプリルフール」) を呼び起こす＞というものである。従って、まず、BASE スペースから V-POINT スペースが派生されそこから EVENT スペースを参照する。そして「今日はエイプリルフール」という命題内容に発話者の言及の中心があるため¹⁶⁾ FOCUS は EVENT の位置にある。

¹⁶⁾ 即ち、その既定知識をかつて獲得していたことやそれをその後忘れていたことよりも描いている事態の中にそれを見出したということに注視していると考えるべきだろう。

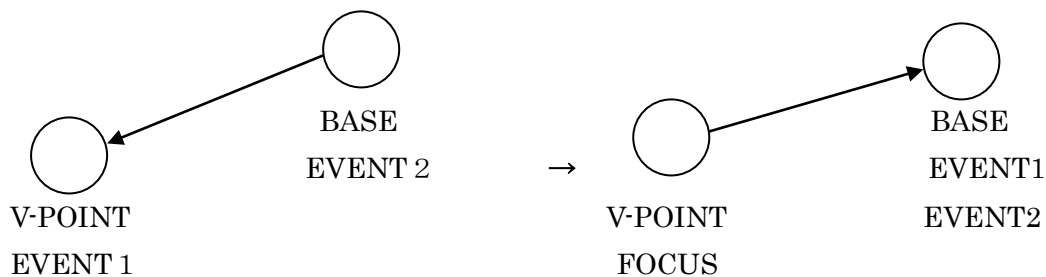
(53) 今日はエイプリルフールでしたね



6. 3. <関連付け (不確かな認識の判明)> : 「やっぱり吉だった」

<関連付け (不確かな認識の判明)>は観念スペース内で<過去に想定していた知識 (規定知識が現実と一致 (実現) した)>というものである。従って、まず、BASE スペースから V-POINT スペースが派生されそこから EVENT スペースを参照する。ここでは不確かな認識 (既定知識 : EVENT1) と現実の認識 (EVENT2) という2つの EVENT がある。そして「吉だ」という命題内容が規定知識と同じだったという意識に発話者の言及の中心があるため FOCUS は V-POINT の位置にある。

(54) やっぱり吉だった



6. 4. <発見> : 「あっ、あった」

「エリザベステラーの6番目の夫は、リチャード・バートンではなくて、クラーク・ゲーブルだった」

本節では<発見>での、動詞文 (状態性) と名詞文で相違点について述べる。

6. 4. 1. <発見 (動詞文 (状態性))> : 「あっ、あった」

<発見 (動詞文 (状態性))>は、<探索時において発話者が持っていた既定知識が現実と一致 (実現) した>というものである。ここでも2つの EVENT が存在する。まず、V-POINT が BASE から派生される (探索)。そこには EVENT1 (既定知識) がある。そこに EVENT2 (現実の認識) が関わる。V-POINT は EVENT 1 にとどまり、EVENT2 は BASE にあり、そこでは2つの EVENT にズレが生まれている (そこから、発見 (驚きのニュアンス)) が生まれる。現在の位置での意識を描いているので FOCUS は BASE の位置にある。最終的に V-POINT は現実の位置に移動する。

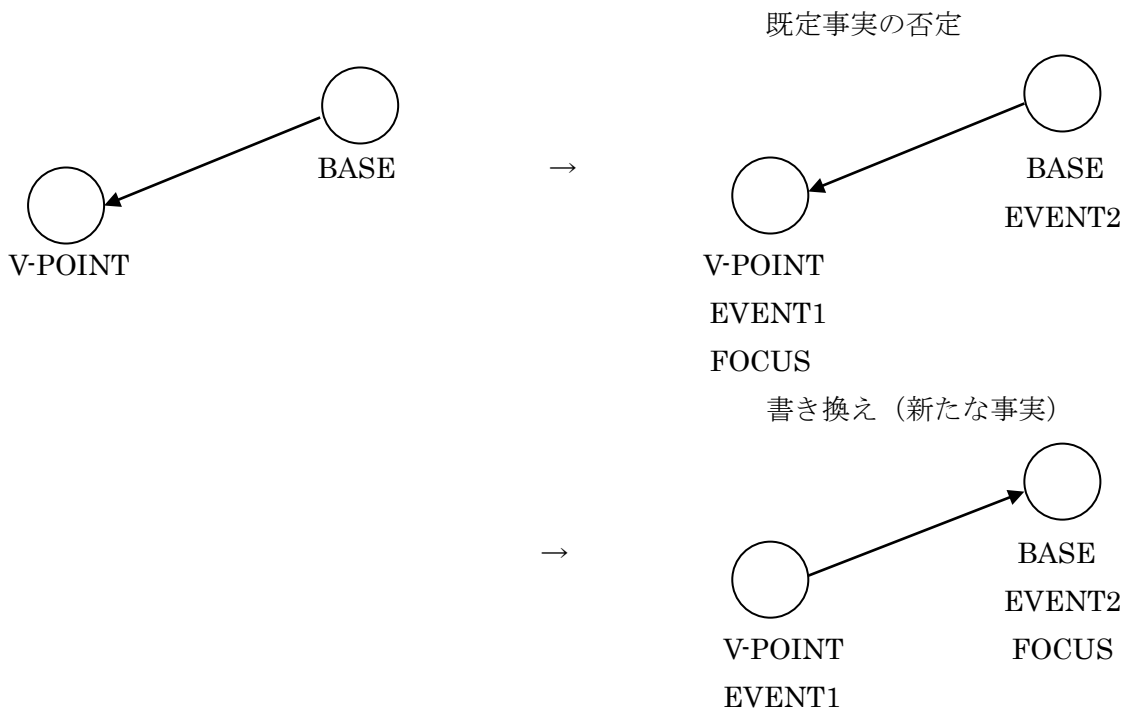
(55) 「あっ、あった」



6. 4. 2 <発見 (名詞文)> : 「エリザベステラーの6番目の夫は、リチャード・バートンではなくて、クラーク・ゲートルだった」

<発見 (名詞文)> の場合、<既定知識が新規知識に変わることで「既定知識の書き換え」が生まれる> というものである。V-POINT が BASE から派生され、そこに EVENT1 (既定知識) がある。ここで現実認識 EVENT2 が関わる。ここではまず既定知識が否定されたことへの驚きがある。FOCUS はそこに位置する。「既定事実の否定」以上に「書き換え (新たな事実)」を注視する場合、FOCUS が現在の位置に移動する。また、「既定事実から新事実への」という視点があるので V-PONT から現実を見ていることになる。

(56) 「エリザベステラーの6番目の夫は、リチャード・バートンではなくて、クラーク・ゲートルだった」



(54) - (56) から<関連付け (不確かな認識の判明)> と<発見> (動詞文 (状態性)) <発見 (名詞文)> との違いが分かる。<関連付け> は規定知識が一致 (実現) したこそ

のものに注視したものであり EVENT の一致がある。それを V-POINT の位置から見ているので V-POINT の位置に FOCUS がある。〈発見〉（動詞文（状態性））の場合、2つのイベントのズレから驚きの感覚が生まれる。ただ、ここでは既定知識の否定よりも現在の新たな認識に注意が注がれているので V-POINT と FOCUS は BASE にある。

〈発見（名詞文）〉には既定知識の否定と新たな事実への書き換えをという2つの過程がある。それらは EVENT に対する BASE・V-POINT の方向性と FOCUS の位置の違いで説明可能となる。

7. 終わりに

以上、本稿では名詞句の時間表現に関して、田村（2008）及び関連論文を批判的に検証しつつ、それをメンタルスペース理論の視点で統一的に記述することを試みた。本稿の主張は以下の通りである。

名詞文（「XはYだ」）において [XはY] の時間的内容を唱える必要はない。しかし、名詞文には指定／措定という根本概念があり、それが名詞文の〈発見〉において、〈既定知識の否定〉と〈既定知識の書き換え〉を導く。指定／措定概念の存在が動詞文の〈発見〉用法との相違点に発現する。メンタルスペース理論を用いることで同じ概念道具を用いて、それらの相違点と関連性を統一的に図式化できる。

しかしながら、残された問題は少なくない。まず、名詞文のタイプに関する問題がある¹⁷⁾。また、〈回想（想起）〉〈関連付け（不確かな認識の判明）〉は本当に動詞文と名詞文間で相違点がないのかも更に検討しなければならないだろう。さらにメンタルスペース理論の枠組みの、より精緻且つ簡潔な整備も必要となる。これらはすべて今後の課題である。

〈参考文献〉

- 井上 優（2001）「現代日本語の「タ」－主文末の「…タ」の意味について－」
つくば言語文化フォーラム（編）『「た」の言語学』pp. 97-163 ひつじ書房
- （2010）「（書評）『現代日本語における名詞文の時間表現』」
『日本語の研究』第6巻1号 pp. 22-27 日本語学会
- 井元秀剛（1995）「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』24
pp. 97-117 大阪大学言語文化研究科
- （2004）「スペースと名詞句解釈」言語文化共同研究プロジェクト2003『言語に
おける時空をめぐるⅡ』pp. 1-12 大阪大学言語文化部・言語文化研
究科
- 尾上圭介（2001）『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
- 奥津敬一郎（1978）『「ボクハウナギダ」の文法』くろしお出版
- 川添一郎（2010）「指定、措定とテンス」『神戸国際大学紀要79』pp. 1-20

¹⁷⁾ 例えば、[Xは[(Wは)Y]]だ]を措定文に含めるかウナギ文と考えるかという問題。

- 神戸国際大学学術研究会 神戸国際大学
 (印刷中)「変項名詞句と役割・値」『帝塚山大学全学教育開発センター紀要 Vol. 2』
 帝塚山大学全学教育開発センター
- 金水 敏 (2000)「いわゆる‘ムードの「タ」’について—状態性との関連から—」
 東京大学国語学研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会 (編)
 『東京大学国語学研究室創設百周年記念国語研究論集』 pp. 170-185
 汲古書院
- (2001)「テンスと情報」『音声と言語Ⅲ』 pp. 55-79 くろしお出版
- 坂原 茂 (1990)「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展』3 pp. 29-66 講談社
 (2001)「メンタルスペース理論から見たテンス・アスペクト」『言語』vol. 30 No. 13
 pp. 80-87 大修館書店
- 定延利之 (2004)「ムードの「た」の過去性」『国際文化研究』21 pp. 1-68
 神戸大学国際文化学部
- 田村澄香 (2008)『現代日本語における名詞文の時間表現』 溪水社
- 西山佑司 (1992)「役割解釈と変項名詞句—コピュラ文の分析をめぐって」『慶應義塾大学
 言語文化研究所紀要』24 pp. 193-216 慶應義塾大学言語文化研究所
 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』
 くろしお出版
- 福田嘉一郎 (2001)「「タ」の研究史と問題点」『言語』vol. 30 No. 13 pp. 32-39
 大修館書店
- 森田良行 (2001)「確実意識を表す「た」」『言語』vol. 30 No. 13 pp. 72-77
 大修館書店
- Comrie, Bernard (1985) “TENSE” Cambridge University Press
- Cutrer, L. Michelle (1994) “Time and Tense in Narrative and in Everyday Language”
 PhD diss., University of California, San Diego
- Donnellan, k. (1966) “Reference and Definite Description” *Philosophical Review*
 75:271-301
- Fauconnier, G. (1985) *Mental Spaces*, Cambridge, Mass. : MIT Press
- Haiman, J (1980) “Dictionaries and Encyclopedias” *Lingua* 50
- Justin Leiber (1991) *An Invitation to Cognitive Science* Basil Blackwell Inc.,
 Cambridge, Massachusetts. (邦訳: 今井邦彦『認知科学への招待』新曜社 1994)
- Rosch, E (1978) “Principles of Categorization” Rosch, E and Lloyd B. B ed.
Cognition and Categorization